

「論説」

林業の現状と課題

ーターニングポイントの予感ー

NPO法人　Woodsman Workshop代表理事　水野　雅夫



はじめに

最近「森林・林業」について発言させていただく機会が増えた。有り難いことである。VIPの発言はいくらでも目にするが，林業ピラミッドの最底辺に位置する山林労働者の発言が表に出ることは滅多にない。社会の環境意識の高まりに後押しされてマスメディアで頻繁に森林が取り上げられるようになり，地球温暖化防止の鍵を握っているようにさえ報じられている。また，林業を志す転職組が増え，新規林業就業者の過半数がIターン，Uターンを含めると全体の8割以上を占めると言われる。ジワジワと注目され始めた森林・林業ではあるが，「現状と課題」をお伝えする際に困ることがある。林業関係者と一般社会との間に「前提となる共通の認識」が乏しいのである。つたない表現でどこまでお伝えできるか不安だが，森林・林業の今を私たちの活動に沿ってご紹介したい。

森林整備NPO法人

私が所属するWoodsman Workshopは，山仕事（森林整備）を職業とするNPO法人である。造林（主に人工林の手入れ）の請負業である。余暇を利用した林業体験グループ，いわゆる森林ボランティアのNPO法人は数多く存在するが，プロの森林整備NPO法人は，私の知る限り国内に二法人しかない。これまでの山仕事は，森林組合や地元事業体の山林労働者が請負ってきた。彼らの大半は地元出身であり「目の前に山仕事があったから」就業した方々である。しかし，前述の通りヨソ者の新規参入が過半数を占め，地元のベテラン達が次々に引退していく現在，数年の内に山仕事のほとんどは「遠い中山間地域に山仕事がある」ことに気づいた者たちが担うことになる。当法人も私を含めて現場に出る4人全てがIターン組である。

私たちの主な活動は，「造林施業の請負」「林業就業希望者の育成」「林業環境教育」「森林の炭素吸収・固定に関する研究および実践」である。少々長くなるが説明させていただきたい。

《1》造林とは間伐（林内の本数調整や販売のために，ある程度育った木を抜き伐りすること）や枝打ち（節が無く付加価値の高い材を造ることと，生長量のコントロールが主な目的）を中心とした人工林の保育作業である。

《2》就業希望者の育成。増加するIターン組を中心に現場作業の基本をレクチャーしている。林業への転職理由は様々である。環境問題にかぶれた頭デッカチがいれば，子供の健康を願った家族ぐるみの移住もある。どんな動機にしても，今ある暮らしを捨てて人生を賭けるのだから，決断を下すための実体験と豊富な情報が必用だろう。情報は上辺のきれい事ではなく生活に根ざしたリアルなものでなければならないし，体験は実際の現場に即したものであった方が良い。正確な判断をしてもらうためと，少しでも技術を身につけて欲しいからである。現場に入ってからの指導体制には，見直すべき点が多くあり，「徐々に仕事を覚えていけば良い」とは言っていられないいくつかの理由があるからだ。**（その一）**毎年50～60人が命を落とす極めて危険な仕事なので，早く仕事を覚えなければ危なくてしょうがない。**（その二）**ベテランの中には名人級の技術者が少なくないが，名人が名監督とは限らない。**（その三）**ベテラン達の多くは子供の頃から親や爺さんに連れられて山仕事に馴染み，学校を出る頃にはそこそこ通用する技量が身についていたようだ。ところがIターン組はそうはいかない。チェーンソーを見たことがない・鉈に触ったことがない・遊歩道しか歩けない，と言うド素人以下，マイナスからのスタートである。こんな新人に「いいか，よーく見てろ。ココはこうしてこうやって」と旧来の「見て覚えろ式」で教えたところで効果は少ない。なぜなら「見て覚えろ式」は，見るべきポイントがわかっている相手に対して有効な方法であり，作業目的の理解さえ怪しいマイナス組には得策とは言えない。**（その四）**職業である以上採算を考えなくてはならない。い

つまでもモタモタしていては解雇されてしまう。**(その五)** 林業技術だけを身につければ順調な林業人生が歩める訳ではない。私がIターン組に伝えたいことの６割以上は中山間地域の生活についてである。私は移り住んだ村を「言葉の通じる外国」だと思った。日常的に屋号で呼び合い，組が暮らしの基本だった。祭には無条件に3日間の休暇を要し，葬式は組と親戚総出の手間をかけた手作りだった。祝儀があれば男衆が夜ごと集まることになる。なった縄で，祝い船やら翁(おきな)と媼(おうな)やら目出度い贈り物を作るのだ。日常において個人の都合など都会の十分の一も通らない。地域によって程度の差はあるだろうが，都会の価値観そのままに雑誌のグラビアを真似た田舎暮らしを夢見ていてもストレスが溜まるばかりだろう。こういった慣習の違いをうとましく思うか興味深く思うかは性格の問題でもあるが，目的意識の問題でもある。

《３》林業環境教育。 総合的な学習が始まり，先生方が困っておられるらしい。森林環境教育という言葉は巷に溢れているが，林業に特化した林業環境教育を提唱しているのは私たちだけかもしれない。間伐体験を通して，山里と都会の暮らし，人工林と自然林，地場産業の話から地球温暖化にいたるまで林業という切り口から話はいくらでも展開させられる。

《４》森林の炭素吸収・固定に関する研究および実践。 森林の多様な機能の中で地球温暖化に絡み，一気に脚光を浴びた機能である。このことについて色々なキャンペーンが繰り広げられているが，ポイントだけは押さえておきたい。(A) 木や草は生長の過程で体内に炭素を取り込み固定していく。しかし，朽ちたり燃えたりした段階で蓄えた炭素を大気中に放出する。つまり植物自身は，大気中の炭素を増やしも減らしもしていない。森林の生長量を大幅に上回る伐採はしてはならない。(B) 地球温暖化の主な原因は化石燃料の大量消費。数千万年から数億年間，地中に固定されていた炭素が一気に放出され，大気のバランスが崩れてしまった。この二点から言えることは，(イ) 森林が炭素を固定しても一時的なことで，正確には地球温暖化防止ではなく，抑止である。(ロ) 化石燃料の消費を減らさない限り地球温暖化の解決はありえない。(ハ) 木材は利用されている間，炭素を固定し続けている。また，優良な木材ほど長期に渡り利用される。法隆寺の柱は1000年以上炭素を固定しているのである。(ニ) 発電・暖房等に木質資源（木質バイオマス）を使うことは化石燃料の使用削減につながり，大変効果的である。結論として，地球温暖化を抑止するためには大規模な森林減少を防ぐと同時に，今ある森林をできるだけ活力あるものにしなければならない。同時に木材の長期利用を想定して付加価値の高い木材生産にも努めなければならない。という訳で，私たちは地球温暖化と森林の関わりを踏まえ，環境に十分配慮した造林技術を探り，その考えを林業再構築の基とし，森林整備の新たな財源を創出し，手入れの進まない森林を整備し，森林というフィールドで炭素をキーワードにした都会と中山間地域の人的交流を広げたいと思っている。Woodsman Workshopとは，そういうNPO法人なのである。

チャンス

ベンチャーによる起業のチャンスはIT産業に限ったことではない。斜陽産業こそベンチャーのチャンスだそうだ。これまでの全てがあって今の斜陽があるのだから，立て直すには「これまで」を検証しなければならない。果たして林業がその作業を十分にしてきただろうか。かけ間違えたボタンを取り繕おうと，上着を何枚も重ねて身動きが取れなくなっていないだろうか。これまでの価値観と既得権に固執する限り抜本的解決は困難だろう。傾いた林業にNPO法人という未だ市民権も無いような法人格で起業した私たちはベンチャーと言うより，ただの無謀とも言える。一切の行政支援はなく，業界からは睨まれ四面楚歌である。しかし断じて五里霧中ではない。確たる思いを秘めて有限会社や企業組合を立ち上げた連中もいる。各地で林業ベンチャーの挑戦が始まっている。やらなければならないことは山ほどある。Iターン組の増加は新たな価値観とキャリアの流入でもある。それらを活かすか殺すかで，林業と中山間地域の将来に少なからず明暗が分かれるだろう。（当たり前の競争が生まれ「業」としての再構築が始まるのだ。）補助金にすがり，ブラックボックスに閉じこもっている林業を白日の下に引っ張り出さなければならない。

拡大造林の影

開いたばかりの双葉に水をかける子供，あるいはスコップを片手に苗木を植える子供，かたわらの大人は，温かい眼差しを向けているだろう。「緑」をテーマにポスターを描けばこんな構図になるのではないか。何十年も変わらないお決まりのイメージは「植える」ことが，無条件に「緑の再生」に繋がる

という盲信が生み出すのだろう。

昭和30年頃から全国の中山間地域を賑わした拡大造林政策は，広大な人工林を造り上げた。後に「間伐材一本担いで下りれば日当が出る」と言われた林業バブルの幕開けである。中山間地域に束の間の「夢」と「金」をもたらした拡大造林は，次々と自然林を伐り開きスギやヒノキ等を植えていった。植栽から40年～50年が経過した現在，間伐材は十分に木材として売れるまでに生長し，造林資金の回収が始まるはずだった。しかし，多くの人工林は不良債権化し，地権者意識の山離れは広大な放置人工林を生み出した。良質材という付加価値はおろか木材生産そのものが危ぶまれ始めた。資金回収の目処が立たないから手入れができないのである。また，手入れ不足の間伐材を売ったところで伐出等の諸経費を引くと赤字になる場合が多く，伐るに伐れない状況である。戦後復興に始まり木材輸入自由化，高度経済成長，バブル経済とその崩壊。林業はいつも時代の波に翻弄され続けた。様々な悪循環の中で，拡大造林の落とし子達は植栽以降ほとんど手入れされることなく，薄暗い人工林にたたずんでいる。

20年後からの再興

植栽から40年過ぎてなお，一度も間伐されていない人工林は少なくない。ビッシリ立ち並ぶ木々の枝葉は絡み合い，林内への日光を遮ってしまう。下枝は枯れ上がり，太ることのできない苗木は，ひたすら太陽を求めて線香のようにヒョロ長い姿になった。陽の差さない林内には，草も灌木も生えない。むき出しの地面からは表土が流出し続け，苗木の根を露出させる。森林の多様性を奪い去った放置人工林は，あまりにも環境負荷が大きい。「植える」だけでは「緑を奪う」こともあるのだ。鳥も通わぬ林内は里の畑を荒らすシカとイノシシの通り道だ。これ以上間伐が遅れると，回復が困難になり木材生産を諦めなければならない森林が急増するだろう。

早急に間伐をしなければならない。林内に日光を入れなければならない。今は良質な木材生産よりも植生の回復，森林生態系の再生に重点を置く必用がある。売れない間伐材を利用するために，多額の税金を用いる必用はない。採算の合う木だけ売ればよい。もったいなくても伐った木は山にそのまま放置すればよい。細かく刻むことは転落による事故を誘発するので，できるだけ枝葉をつけた長材のままがよい。林内整理には切り置き間伐の３～４倍の手間がかかり，伐出には７～10倍の手間がかかる。逆に言えば伐出している時間があれば，７～10倍の面積が間伐できるのである。本数率で４割以上の思い切った強度間伐が必用である。２～３割の間伐率では下草や灌木が育つ前にまた日光が遮られてしまう。地理条件によるが，売り物にならない樹齢40年の人工林も，強度の間伐を施すことで20年後には必ず採算が合うようになる。20年後（樹齢60年）さらに10年後（樹齢70年）に間伐材を売り，樹齢80年の主伐を迎えられる。100年まで伐期を伸ばしても良いだろう。今は儲からないし，補助金漬けと言われても仕方ない。とにかく今は，間伐面積を増やし森林生態系を回復させ，20年後からの立て直しに備える時だ。そのための財源を創出しなければならない。人工林の窮状を広く伝え，水源涵養・炭素固定を含めた森林の多面的機能に対して理解を求めなければならない。非効率な有効利用などに時間を割いていると，20年後に売り物になる材は1/10～1/7しか確保できない。アジア諸国の経済発展と輸送時のCO_2排出削減対策に伴い外材の値段は必ず上がる。環境への配慮から野放図な外材輸入は続けられない。国産材の供給を求められた時にどれだけロットを揃えられるか，そこに国内林業再興の分岐点がある。そのためには今が肝心だ。20年後からの再興に備えた大面積の間伐を今すぐに始めなければならない。拡大造林の落とし子達を時代の申し子にするために，先人達の血のにじむような努力を無駄にしないために，環境と産業，都市と中山間地域，森林生態系など，様々なバランスに配慮した新しい林業へのスタートを切らなくてはならない。緑がテーマのポスターに今は苗木はいらない。森林（人工林）に今，最も必用なことは「伐る（間伐）」ことである。

森林・林業のターニングポイントを決して見逃してはならない。



林業就業者のための間伐研修会